

伝豊臣秀吉着用の陣羽織に関して

吉田雅子（京都市立芸術大学）

名古屋市秀吉清正記念館所蔵、伝豊臣秀吉着用の陣羽織に関して考察する。この作品は、秀吉の正室である禰々の関係の木下家において秀吉着用と伝えられたもので、南蛮服飾の代表作例とされてきた。しかし制作地も制作年代も、いまだ明らかになっていない。本発表では、材質、技法、文様の点からこの陣羽織に考察を加え、その制作年代と、陣羽織に用いられている生地と刺繍の制作地を推定する。

まず、衣料形態だが、この作例を16世紀の欧州製マントと比較すると、これはマントを仕立て直したものであり、その原型となったマントは1570年代以降に制作されたものであることが窺われる。

次に、織物と刺繍に目を向ける。用いられている織物はすべてビロードであり、その糸と織物組織を分析すると、これらのビロードの特徴は中国製のビロードの特徴と合致する。刺繍の糸と繡技を分析すると、これらの刺繍もやはり中国製品と類似した特徴を有している。また刺繍の技法の一部には、ポルトガルに向けて輸出するために、インドで生産された刺繍との共通点が見出される。

さらに、この作品に表されている文様を考察してゆく。身頃には大型の花文が配されている。この花文の完全な形を紙上で復元して類例と比較すると、この花文の原型は欧州の花文と類似性が高いことがわかる。襟には、生き物が組み込まれた花唐草が配されている。これを欧州の写本の作例等と比較すると、この生き物はドラゴンであることが窺われ、この花唐草もやはり欧州文様を下敷きにしたものであると推察される。身頃のボーダーには、人物と動物が組み込まれた唐花文が配されている。これを欧州の唐花文やグロテスク文様と比較すると、この文様の構成も、やはり欧州的である。さらにこの唐花文の細部には中国的な特徴が看取され、人物表現はポルトガル向けに、インドで制作された刺繍の人物表現と近似している。

以上を勘案した結果、用いられている生地はビロード、刺繍ともに中国製であり、これらの生地は欧州文様を手本とし、インド・ポルトガル刺繍の影響を受けて制作された可能性が極めて高く、この陣羽織の制作年代は16世紀後半（1570年以降）～17世紀初頭と推察される。

16世紀後半から17世紀初頭における欧州、中国、日本を結ぶ交易に加え、インド交易の影響が看取されるこの陣羽織は、大航海時代の複雑な交易関係を反映する、極めて貴重な作例である。